
S.D.F ZERO? - ?

K-hell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S・D・F ZERO？！？

【Nコード】

N89400

【作者名】

K-hell

【あらすじ】

S・D・F・ZERO？の第二章。力を持つ者と持たざる者、荒廃の世界を生き残るのは一体誰か。バイオロイド、クリーチャー、大地震の三つのキーワードが重なるとき世界は終焉へと向かうのであろうか。

0>選べる、選べない。これはあたし、あれがあなた。ルイは川辺で石を積み上げていた。だが誰かの脚が山を崩す。せつかく積み上げたのにやり直した。

「何で崩すのよ！何でよ！何で！！」

1>2008年7月28日 大韓共和国 漢陽^{ソウル}>

目覚めが悪いのは妹と同じくらいの年頃の子だから重々承知していた。と言えば聞こえは良い…実際は嘘だ。うん、そう困惑。ツバキは困っていた。粗方の事情は、自称ルイの身元保証人である六芒星のペンダント『ルイ』から聞いていたので、ルイが目覚めた時のツバキに対する反応も想像できた。自分を恐れるだろう。でもツバキ自身は側にいることを選んだ。これだけは確かだった。

ツバキがルイを発見したとき、ルイは右頭部からひどい出血があり、一刻を争う状態だった。6回の手術で何十針も縫う山だった。ルイは奇跡的に命を繋いだ。それは彼女を助けたツバキも素直にほっとできることだった。

ツバキの悪い癖は何か理由を付けて自分だけ納得してしまうことだ。理由は後付け、どうとでもなる。逆にいい面では、彼は非常に面倒見が良く、他人に優しくなれる人だった。まあ世話焼きともいうがヒトそれぞれだ。

結局、照れてモジモジしていたツバキはルイが目覚めるまで側にいたが、目覚めの悪い『眠り姫』に癪癪を食らい、半泣きになって病室から追い出されたのだった。草食男子がツンデレに蹴り飛ばされ

る光景に似ている。理不尽ドンマイだ。

さて半泣き皇子が出ていき、2人…いや、1人と1つきりになった。私はルイと辻褃合わせをことにした。今後タイムラグがルイとツバキの間に無いようにしたかった。さて、混乱を静めるか。

「ペンダントに身を落とした私をどう思う、笑えるか？」

相変わらずのしかめっ面。答えようがないでしょうと言わんばかりの態度だ。やれやれ。

「目覚め最悪よ、笑えない。で、今はいつで、ここはどこ、あいつは誰」

ご立腹だな。それは仕方ないでしょう。私が苦笑してしまったせいで、ルイの表情は更に曇る。

「2008年7月28日大韓共和国漢陽だ。あいつは知っての通り、ツバキという日本名をもつ韓国総督代行の陸葵皇子だ」

聞く気がないわけではないらしい。ルイは私をじっと見つめる。その環境適応能力は合格だ。

と思ったのも束の間だった。また癩癩が爆発だ。

「なんで戻っているのよ！殺せよ！私を取り殺せ、貶して、塵クズのようにさ！！」

焦った。ルイにとって以前の世界が全てだったらしい。それが夢であつたとしても。ルイの癩癩玉の火を再燃させないように私は消火

しなければならなくなった。この世界のルイとあの世界のルイを断ち切らなければいけない。また未来を選ぶセカンドチャンスなのだから無駄にはできない。

「ゆっくり息を吸って、君の名前、生年月日、それに血液型は？」

「サナダルイ… だと思うわ。 1999年5月21日生まれ、B型… でしょうね」

語尾がツバキ並みに自身無しだ。ルイは目覚めのショックをそれなりに受けているのだろう。それとも右脳のダメージが余程で海馬まで入ってしまったか。私の心配をよそにルイは何故かうズウズウズしていた。それは物珍しい私に対するもので、目が眩しいくらい輝いていた。

「ねえ触っていい？ あんたってもう一人のあたし何でしょ？ じゃあ、あたしが呼び名付けたげる」

このルイはどうやら『前世のルイの記憶』をもっているが、9歳児の思考回路だ。つまり、クソガキに戻っていた。やれやれ。

「ルイ、お前自分のサイン書けるか？」

ルイの動きが止まった。馬鹿丸出しのきょとんとした表情を私に向けた。

「知ってるわ… あっちの世界で使っていたサインね」

ほう、『あっちの世界』と区切ったか。感心だ。ルイはツバキの忘れものと思われる紙とペンでさらさらっと書いた。LUIと読める丸文字。私は笑っている少女に見えるこのサインが好きだった。

「ニヒマルマークだよ」

「今度から私を『ニヒマル』と呼ぶように。ツバキにもそう言っている」

ルイはむすーっと子供らしい怒り方をした。なんだ、嫌なのか。

「そうじゃないもん。あたしが付けるって言ったじゃん」

「黙れ、クソガキに戻りやがって。問答無用だ。ツバキに謝れ、その次に読者だ」

忘れ物をそーと取りに来たツバキにルイは謝った。素直でいい子だ。面倒だから、あの殺戮マシーンだった記憶が戻らないで欲しい。リスタート。

2>8月1日

「ルイ、リハビリは順調のようだね」

ツバキは心底嬉しそうだ。良いお兄ちゃん面だ。

「うん、お兄ちゃんがいつも側にいてくれるからだよ。ありがとう。あのね…お礼にね…お兄ちゃん、キスしよ」

まだ松葉杖のルイにドラマだからと冗談で仕込んだのは私だ。ツバキの素の反応を見たかった。この男はただの愛すべき馬鹿兄か、それとも殺戮皇帝か反応で試したかった。

「ばばばば馬鹿言つなよ。ばばば僕はそんなエッチなこと、ででで

「できな」

だいたい予想通りの反応。失踪中の実の妹が見たら即倒だな。浮気者め。

「ふーん、舌を強引に捻じ込んでこないのね。完熟トマトで安心したわ」

皮肉混じりの強気な口調。記憶が戻ったのかはさて置き、私の傍観者はそろそろお終いかも思えないと思った。

ルイは誉めて貶しての飴と鞭が極端だ。追撃。

「あんたってマジで駄目人間ね。赤くなつた時点で負けよ。少しは妹さんに悪いと思えつての。それにこれ…」

ルイが臭いもの掴みでひらひらさせる紙を見て、ツバキは目の色を変えた。LUIの文字が笑っている。肝心なのはその裏だ。ただの数字の羅列。ん、待てよ。08・08・02。マジで駄目人間。私も怒るぞ。

「お前馬鹿か！危機感持てよ、もっと慎重に事を進めろって！」

青い顔が返事をした。

「ご…ごめんよ。手帳に破いた跡があつて、無くしたと思って探してたんだ」

ルイは敏い子だった。何か書いてあることに気付いたんだろう。破いて隠していた。明日の日付が書いてある紙でしかない。でも、お

いそれと返してくれる訳ない。説明責任。ルイの視線を直で受けてツバキはがくりと項垂れた。まだ傍観者でいようと私は口出しを止めた。

「ルイに黙っていたことは謝るよ、ごめん。明日2008年8月2日は、第一の世界で『韓国クーデター』があつた日だ。妹が死んだ日。でも僕は…」

知っていても何もできない。無責任だと言ってしまうのもヒトだ。それとも未来は決まっていし、ツバキの妹はここにいないから何も起こらないと高をくくるか。

「ふーん、だから何だっけ言うの？」

ルイは投げやりだった。怒りのレベルが彼女にしては低い。そう思うと、やはり逆襲のルイ。

「当然でしょ。未来に偶然はないわ。明日、私が代わりに死んでしまったら歴史通りね！あんたは何一つ選んでないわ。それに私の選んだ問題じゃない！もううんざりよ！！死んで償っても足りないくらいだよ…」

ルイはよろよろと二つの杖で小さい身体を支えて歩く。皇子はショックで頭が真っ白だ。例のごとく追ってこない。でも今度泣いていたのはルイの方だった。左脚が上手く動かないもどかしさ。これじゃあ、本当に『足手まとい』だ。

3>8月2日

深夜の寝静まった病棟。消灯時間はすでに過ぎ、日を跨いでいた。しかし、ここに闇夜を漂う目が二つ。ルイは寝ていなかった。世界

が寝ても寝ない覚悟だった。

「何もお前が寝ても誰も怒らないぞ。きっと目が覚めるころには全て終わっているさ」

本当の私は希望を吐かない、ただツバキを信じたかった。そしてルイにも信じて欲しかった。今、彼女が頼れるのは彼だけだった。ルイが意味なく精神的に削れていく世界は見るに堪えなかった過去もある。だが、ルイは安息を選ばなかった。

「ニヒマルは私を甘やかし過ぎだよ。私はたとえ足手まといになっても、裏切られても何とかできるわ。ただ、私の人生に責任を取りたいだけよ。それにどんなに逃げても隠れても殺気は消えない。」

そしてルイは小声で言った。『私を殺そうとする奴が近づいてくる』

その判断は正しかった。ルイが抜け出していたベッドにナイフが突き刺さった。息を飲む間もなく、ベッドを中腰で乱暴に引っ張り上げる男の首に延長コンセントの線を巻き、絞め落とした。すぐナーコールのボタンを押し、さっきの線を使い窓から飛び降りた。手際の良さは、一体どちらが暗殺者だったか分からなくする。ほとんど足場のない病院の壁を器用に地上まで降りた。

「ルイ、お前は戻った以上の動きだな」

脱帽だ。本当に歩けなくて泣いていた少女と同一人物か。

ルイは枕に突き刺さっていたナイフをくるくる回し弄んでいた。年に似合わない不敵な笑みだ。

「当然でしょ。機密局でそれなりの訓練を受けたもん。まさか一瞬で勘を戻すとは思わなかったけど。まあこんな感じよ」

素直に喜べない。何か引つかかる回復の仕方だ。だがルイがルイらしく戻ったのに変わりない。ここは置いて、まず現状だ。

「事態は最悪かもしれない…」

「…どうして最悪なの？うーんと例えばどういうこと」

「頭が技に付いてきてないようだな…お前は…」

当然彼女は怒った。傍から見るとルイの一人芝居に見えるだろう。現実には呆れるのはここまでだ。数字の本当の意味までは分からなかったただけだ。

「ツバキが殺されるかもしれない…」

「何、それ」

ルイの目は世界を失った。そう、前の世界でツバキの妹が死んだ。じゃあ、この世界では誰が死ぬんだろう。読者の視線は大切だ。

〈第一の世界 2008年8月2日〉

二日前に高熱を出して入院していた妹の見舞いだった。もう熱は下がり今日か明日には主治医の話では退院できるそうだ。ツバキは約束の時間にはまだ早いので、律儀に待合室で時間を潰していた。後に彼は自分の正直さを呪った。

爆発音。彼は逃げる人に逆らい、妹が待つ病室へ全力で走った。何

が起こったかよりも爆音で怯えている妹を慰めることは大切なことだった。

おかしい、妹の病室のドアが半開きだ。不吉が駆け抜けた。彼はその光景に絶句した。防護服を身に付けた尊敬する父が、口から血を流し息絶えたツバキの溺愛する妹を抱えて立っていた。彼は事実を把握する冷静さを失った。

『父は妹を殺した』

怒りが勘違いを加速させた。理由なしに実の娘を殺める父親などいない。少なくとも私はそう考えた。ツバキの妹は誰かの手に捕まるよりも舌を嚙んで自決したのだ。

第二の世界のツバキには縁のない話のようだったが、一応彼の耳に入れた。日本に留学する妹の安否は不明なのだ。何かしら反応するかと思った。けれど彼は宙を見つめたまま答えなかった。何も映っていない人形のような目だった。不気味だ。

くさて、世界を戻そう。ルイをツバキの妹と間違え殺そうとした犯人は誰か。そのナイフは北部ゲリラのマークが刻まれていた。偽装だ。恐らく襲った男は金で雇われた人間だ。

「考えたって仕方ないよ。だったら敵が動く前にあたし達で計画を倒すのよ」

ルイの行動力は頼もしい。私も考えてもきりがないと思う。

4 > 8月2日中編？

夜明けに紛れて現れた少女は明らかに不審な動きをしていた。監視

モニターが次々とダウンしていくことに気付いた時点で手遅れだった。

「ニヒマルの手を借りるまでもなかったわ。総督の家ってちゃんとセコムしているのかしら」

ルイ、お前も下手に動くなよと私は釘を刺した。ルイに向けられたのはもう一つあった。後頭部に銃口。韓国軍の対ガス兵器マスクを被った兵士だ。ルイは落ちて着いて両手を左右に開いて立った。

勝算はあるのか、いやその必要はない。銃口は下がる。マスクをはぎ取った顔はツバキだった。

「無事だったんだね、ルイ」

ルイは振り返り様にツバキの頬を引つ叩いた。

「何でここにいるのよ、バーカ…ってところだけど、ツバキも生きていたのね」

殴った上でルイはツバキの頬を撫でた。誉めたげる。

「殴って誉めるの？あのね、残念だけど父はもうここにはいないんだ。昨日南日本の福岡へ発ったよ」

クーデターは未遂。結局、犯人は分らず終いだ。この第二の世界はどうやら独自の歴史を歩み始めらしい。まずはみんな無事で何よりだ。

ツバキは心配してくれたことを感謝しつつも苦笑いした。

「よかつたとも言えないよ。父がいない間に僕はその側近を3人警察へ送ることになった」

「ふーん、私を餌に釣ったのね」

「あはは、ニヒマルが付いていてくれるから大丈夫だと思った…つて言えば、また鉄拳制裁かい」

先読みされルイはむっとするだけになった。ツバキは遅れながら歩ける以上に回復したルイに感動して涙を流した。この男は本当に男っぽくない。前の世界の『ツバキ』とは同一人物ではないと思わざるを得なかった。

「ねえ、ルイは南日本へ行ったことあるかい？」

「また拉致するの？あんたとなんか行つてあげるわけ…」

私はルイの減らず口を遮った。とりあえずツバキに加担しよう。

「ルイ、あのさ、確か今度の修学旅行は神戸じゃなかったかな？」

「はあ？いつの時代の話よ、ペンダントになって忘れたの？2008年時点で私は8歳なのよ！行ったことない…は、しまった」

追撃のツバキの満面の笑顔。少女と勘違いされそうだから表現を自重したい。

「よかつたあ、前の世界で行ったことあるってニヒマルが言っていたからね。じゃあ、里帰りしよう」

「わかったわよ…行くわ。ただし、しっかり案内してよね。前の世界でも余り滞在してなかったんだから」

言われてみるとそうだな、前世の記憶ってほど当てにならない。ルイは間もなく里帰りする。

5>8月2日中編？

蒼い海が日光に照らされ揺らめく。なるほど、ここはもう旧日本海域らしいな。ルイの心の闇を作った国か。本人は私の感傷を知りもせず、さつきからはしゃぎ放題だ。機内ではしゃぐのは他のお客様の迷惑になりますのでお止め下さい。

「あはは、海は広いな〜、日本海！ここが日本かい！…なんちゃって。ニヒマル、この大海原にぶん投げてやろうか」

ルイは自分でボケて突っ込んで自爆した。私のリアクションの乏しさなど、たががPC知っているだろう。この海にダイブ？私は全力で拒否る。全力で水に弱い。全力で防水機能を求めるぞ。一方で座席に深々と腰を掛けて、目を閉じているツバキは終始無言で様子が変わだ。なんだ、乗り物酔いか。ルイは疑いの視線を送る。かつとツバキの瞳孔が開く、声にならない声を吐きだした。もしかこれは…私は悟った。同席していたツバキの秘書官がニヤリと毒を盛った笑みを落とす。

「ルイ、ツバキが女に毒を盛られた！この女をぶっ飛ばせ！」

秘書官はペンダントが叫んだことに驚いて一瞬動きが鈍った。注射針を振り下ろす腕は、ルイの目より遅かった。

「失せろ、メス犬！」

注射器を手首ごと蹴り飛ばす。ツバキの顔色は急速に冷えていった。もう時間がない！ルイ、急いでくれ！！

女は蹲っていたが立ち上がる。その手首からインプラントの刃が生えていた。この女、人間じゃない。

「お前はやはり消しとくんだった」

斬りかかるが狭い機内では小柄なルイの方が機動力は上だった。

「ふーん、でもあたしの方が強いわ」

はじき飛ばした注射器を女の喉にズブリと突き刺す。噴水のように血が噴き出す。女はのたうちまわるが、ルイはとどめ喉に蹴りを入れた。女のけいれんはピタリとなくなった。

この機体が傾いているのに気付いたときに機長は脱出した。クソどろろ！時間がない！水と死の瀬が徐々にやってくる。ツバキはふらふらと立ち上がった。私はこのツバキに急に握り絞められた。指圧の生温かさと指の間の嫌な汗を感じた。

「僕と同期しろ…端末…なら出来るだろう」

ペンダントが出来る訳ない。そう思った次の瞬間、私は人間の感覚を受けた。額の汗、霞む目、胃から吹き上げる強烈な吐き気に思わずひざを落とす。

「ツバキ、大丈夫？」

ルイは私の同期を知らない。ツバキの瞳孔は赤く染まった。完全同期完了。

「誰よ．．あんだ」

「ツバキの身体を一時的に預かった。今から私が操縦する。いくぞ、ルイ」

「ニヒマル？わかったわ、了解」

水面ギリギリで機体を滑空成功。ルイは腰を抜かした。私のデータに自家用機の操縦技術はない。これはツバキの身体に染みついた能力だ。詮索しようがない。何はともあれ、私たちを乗せた機体は北九州市小倉に降り立った。ツバキの身体は限界を越えた。彼の潜在能力はヒトを遥かに超えていた。しかし、ゲームオーバーだ。強制同期解除。

6 > 8月3日 小倉危機（序幕？）

ルイは自責の念が強かったらしい。涙が止まらない。小倉駐屯地の自衛官も泣いてばかりいるルイに何も聞けずにいた。機内で人が死に、そしてもう一人は生死の境にいた。『自分は他人を不幸にする』ルイの罪悪感の根源だ。日本人はつくづくヒトに優しい。泣けば何でも許されるのか。去っていく隊員の困惑顔を私は見送った。馬鹿馬鹿しいが、それが日本人なのだろう。

「いつまで泣いているつもりだ。ルイ、もう先に進むしかないんだ」

ルイは涙目をこすり、鼻水をすすり上げる。まだ子供だ。ルイの口は小動物のように小刻みに震える。

「だって、私助けられなかった…ツバキが死んじゃったら、あたしまた独りだ」

孤独はヒトを苦しめる。PC端末の一端でしかない私は、ルイの気持ち全てを理解できない。PCらしく味気ない言葉か、それともヒトらしい慰めの言葉か、私は悩んだ。所詮温かさのないものの声とルイに受け取られることを本能的に拒否していた。同期する度に受ける人間らしさは、やはり私にとって煩わしい。

「私たちはやるだけやった…後は信じよう」

ルイは小さく頷いてくれた。その弱弱しさにルイの方が危篤なのは、と私は気が気でなかった。私たちの叫びを代弁するかのように非常ベルが鳴った。クリーチャーの襲撃だ。

「犬だ！犬の化物だ！！」

廊下に響く怒声。銃撃音。また怒声。いつしか恐怖の声が混じる。ルイは頭を抱えて首を横に振り続ける。頭痛。向こうの世界では、ルイは恐怖で満たされる時、頭痛に悩まされていた。私はルイがルイでなくなるような場面に幾度なく立ち会ってきた。今日もか。

「ニヒマル、私はあいつ等と闘うわ」

「自殺行為だ、止める。せめて私と同期しろ」

私から強制同期できなかった。なぜ。気付けば私の方が錯乱していた。ルイは頭の碎けた死体の手から銃を取った。ルイの瞳孔は見たことがないオレンジ色に染まる。つまり、半覚醒状態だ。前世の能

力を今のルイが何故開花しているかはわからない。

「お前は誰だ…」

立場逆転だった。私以外にこの状況を楽しんでいる黒幕がいるような感覚を受ける。バイオロイドか。

「私、気付いたの。私は2011年から来た人間だってこと。自分の過去は自分で清算しなきゃ」

タイムトラベラーが時間断層を通過するとき異能者になることもある。だがルイはそれでも12歳だ。迫りくる四足のクリーチャーの胸を蹴り飛ばし、銃で内臓を吹き飛ばす。普通の鈍重なクリーチャーと違い、犬に似た奴らの動きは早い。ヒトの目が捉えられない高速移動する奴らと互角以上の闘いをしている。

ルイの武器はいつの間にかナイフに変わっていた。ブラッディウルフ。前の世界での異称だ。ルイが両手にナイフを持った時点で敵なし。ルイと敵が交錯したとき、敵の首が飛ぶ。

ルイは負けない。私は傍観を決め込んだ。

7>8月3日 小倉危機〜序幕？

ルイが半覚醒したとき、ツバキは生死の淵を彷徨っていた。

『お兄様、さようなら』

誰だ、お前は僕の妹か。いいや、僕に妹はいない。僕がそう答えると残念そうに彼女は笑った。近づく汽笛。僕は彼女に地下鉄のホームから突き落とされた。列車は止まらない。光が間近に迫る。僕の身体は肉片となり、血飛沫を上げ飛散した。生首が最後に見た光景

は、手を振り微笑みかけるもう一人の僕だった。君は誰だ。

ベッドの上にいて安心した。頭を整理しよう。僕は信じていた秘書に毒を盛られ死にかけた。夢では地下鉄に撥ね殺された。散々だな。僕はまだ力のない身体に気付き、急速に現実へ戻った。

「生きることって死ぬより辛いんだな…」

僕には感傷に浸る暇さえなかった。カーテンを引き裂いて、日本刀が眼前まで迫った。裂けたカーテンの向こうに立っていたのは、夢でみた彼女だった。僕に似た顔の彼女は、白い肌に対称的な黒衣の武装、そして幼女のような黒髪のスィンテルだ。ようなとは、殺意の籠った瞳孔がとてもヒトのものではなかったからだ。彼女は言う。

「お前が私を導いた…同じ匂いがする。でも殺すのはお前ではない」

彼女は刀を下ろした。踵を返すと綺麗に整った後頭部が見えた。

「ちょっと待てよ！」

彼女は僕の制止を聞かず去った。僕の身体はどうなっているのか。ここにいたら駄目だという。もう解毒の点滴もいらなくらいだ。彼女が何をしたかわからないけど、今度は身体に力が入った。もう逃げるしかない。生命を賭けての逃走の始まりだ。

さて、ここからは『私』が話を引き継ごう。

小倉の街はあちらこちらで火災が発生していた。だが消火しようとする者はいない。黒い皮膚の6つ目のクリーチャーが這いずりまわ

り、溶解液をばら撒いていた。そのガスによる中毒で運動神経麻痺に陥った人間が犬のようなクリーチャーの格好の餌となった。そういった爪と牙でずたずたに引き裂かれ、ウイルスに汚染して苦しみながら絶命する。小倉北区、南区一帯にレベル5非常事態宣言が出された。

ツバキは外の世界に絶句した。ヒトの首、手、上半身、脚がゴミのように散らばっている。焼け焦げた異臭が鼻を壊そうとする。なるべく見ないように走った。ようやく逃げまどうヒトの群れに追いついた。自衛官がバリケード封鎖まで時間がないと急かす。間一髪でツバキは飛びこんだ。封鎖後すぐに犬が逃げ遅れたヒトを襲った。腸を抉り取られている。自衛官の標準の定まらない銃では奴らの足止めも難しい。ツバキは幸運だった。だが生き残る一方で、血の気が失せる。

「平尾台に向かって非難して下さい！時間がありません、早く！」

ツバキは走った。息がかつてないほど上がる。死ぬ、死ぬ、死ぬのか。手から泡がこぼこぼと溢れ出す。

バリケードはクリーチャーの溶解液で無残に崩壊した。宙を駆ける犬どもが逃亡者を一斉に襲う。ツバキも右脚を噛み切られた。ここまでだ。諦めかけたツバキは目を疑った。

「僕の脚から血が流れてない」

代わりに流れるのは半透明の液体。しかも驚いたことにまだ身体は動ける。裏切った秘書が僕に何か打っていた。あの注射はなんだったのか。そうこうしている内に犬は去って行った。周りの人間は動けるツバキを恨めしそうに見る。この場から一刻も早く逃げたい。

しかし動けない日本人が多くいる。ツバキは目を閉じ心の内で詫びながらまた走り出した。夢で一瞬に引き殺された彼は、現実世界では生殺しだった。

もう走れない。犬は何処へ行ったのか追ってこない。ツバキは息絶えそうな人間の重い視線を踏みつぶし、ここまで逃げた。虫の息のスーッ姿の青年の脇を通った時だった。

「その君…頼む、止まってくれ」

無視しようとした。何度もそうしてきた。ツバキは唇を噛みしめた。

「僕は馬鹿だ」

踵を返す。青年は目から赤い涙血を流していた。クリーチャーの毒ガスを食らった最期の状態だ。両膝から下を失い、もはや彼は逃げられない。

「俺はもう助からない…この子を頼む…」

そう言うとき青年は息絶えた。ツバキは青年に抱えられていた少年を引き離して背負った。その少年は気を失っていたがこれといって外傷はなかった。ツバキはまた走り出す。心音が壊れたように叫ぶ。死のレースに参加している気分だった。

T o b e c o n t i n u e S . D . F Z E R O ? , ?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8940o/>

S.D.F ZERO? - ?

2010年11月17日03時17分発行